

# インフラツーリズムのさらなる拡大に向けて ～勘所～

杵島 駿<sup>1</sup>・濱 福一<sup>2</sup>・藤木 敏治<sup>3</sup>・三浦 錠二<sup>4</sup>

<sup>1,2,3</sup>九州地方整備局 企画部 企画課 (〒812-0013 福岡県福岡市博多区博多駅東2-10-7)

<sup>4</sup>九州地方整備局 企画部 (〒812-0013 福岡県福岡市博多区博多駅東2-10-7) .

各地において、インフラへの理解を深めてもらうことや地域の観光資源との一体的な周遊による観光交流の増進・地域活性化につなげることを期待して「インフラツーリズム」の取り組みが行われている。

九州地方整備局では、日本旅行業協会（JATA）（以下、「JATA」という。）と連携し、九州管内のインフラを対象としたモニターツアーを過去6回実施しており、実施後には参加者に対してアンケート調査を実施している。

本稿は、モニターツアー実施後のアンケート調査の結果から管内インフラの観光資源としての可能性や課題について考察し、インフラツーリズムの拡大における「勘所」として報告するものである。

キーワード インフラツーリズム, 広報, 地域活性化

## 1. はじめに

近年は新型コロナウイルス感染症の影響により、外出を控える人が増え、旅行に行くにも「少人数で」「近場で」そういった傾向が強くなった。旅行・観光消費動向調査<sup>1)</sup>によると、2020年から国内旅行者やインバウンド観光者数は減少したが、2022年1-3月期の旅行者数は前年同期比で22.2%の増加、日本人国内旅行消費額は35.4%の増加がみられた。感染者数の減少に伴い、これから観光への関心が高まっていくものと思われる。

「インフラツーリズム」という概念は2013年6月にとりまとめられた「観光立国実現に向けたアクション・プログラム（観光立国推進閣僚会議・主宰：内閣総理大臣）」<sup>2)</sup>の中で示されたものであり、図1に示すとおり、

土木施設の役割や必要性を学ぶ見学会に加え、地域の組織や旅行会社等の民間事業者と協力して、インフラ見学と周辺観光資源を組み合わせることにより、広く国民にインフラをより深く理解していただきながら、地域の活性化に寄与させるというものである。国土交通省では、インフラツーリズムを紹介するポータルサイト<sup>4)</sup>を2016年に開設し、インフラツーリズムの拡大を促進している。

九州地方整備局では、インフラツーリズムを推進するため九州管内のインフラを対象に過去6回、JATAと連携したモニターツアーを実施した。実施後のアンケートにより、観光資源としての魅力や可能性、課題等を取りまとめたため、インフラツーリズムのさらなる拡大に向けて考察し報告する。

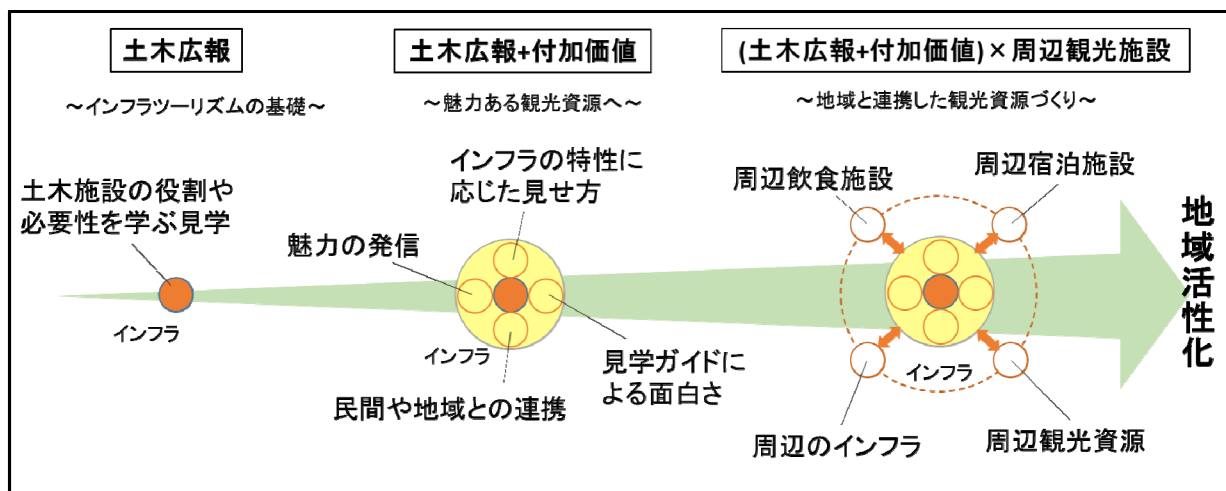


図1 インフラツーリズム イメージ図(インフラツーリズム拡大の手引き(国土交通省総合政策局)<sup>3)</sup>を参考に作成)

表-1 モニターツアー実施概要

回	第1回	第2回	第3回	第4回
開催日	2016年11月25日(金)	2017年11月15日(水)	2018年11月5日(月)	2019年10月9日(水)
参加者	旅行会社13社24名	旅行会社11社21名	旅行会社13社30名	旅行会社10社21名
見学コース	①日田祇園山鉾会館 ②松原ダム ③松原ダム遊覧船体験 ④松下ダムカレー ⑤下笠ダム ⑥杖立温泉街 ⑦意見交換会	①魔林峡・猿飛千壺峡 ②サイクリング ③レストハウス ④耶馬溪ダム ⑤意見交換会	①金粟四三 生家 ②三加和公民館 ③金粟四三ミュージアム予定地 ④金粟四三 住居・墓地 ⑤高瀬船着場跡地 ⑥大河ドラマ館予定地 ⑦意見交換会 ⑧観光ほっとプラザたまらら	①あそ立野ダム広報室 ②立野ダム展望所 ③たてのてらす ④道の駅「あそ望の郷くぎの」 そば打ち体験と食事 ⑤阿蘇五岳を一望 ⑥白川水源 ⑦意見交換会

回	第5回	第6回
開催日	2020年9月29日(火)	2022年3月25日(金)
参加者	旅行会社8社17名	旅行会社8社23名
見学コース	①関門海峡ミュージアム ②旧大連航路上屋 ③門司港レトロ ④太刀浦コンテナターミナル ⑤部埼灯台 ⑥下関港海岸工事現場 ⑦唐戸地区・あるかポート地区 ⑧巖流島 ⑨意見交換会	①新阿蘇大橋 ②道の駅 ③緑川ダム ④美里の森キャンプ場 ⑤通潤橋史料館・通潤橋 ⑥意見交換会

## 2. JATAとの連携体制の構築

JATAは、2011年4月に設立された一般社団法人日本旅行業協会の通称であるが、会員数は正社員だけでも1,100社を上回る大規模な組織である<sup>9)</sup>。九州地方整備局では、2016年度から九州管内のインフラを観光資源としてPRできるか、プロの目で見ていただく場を設けるため、JATA九州事務局と度重なる協議調整を経て、最終的にJATAは加盟する旅行会社のツアープランナーの研修として取り扱うことで連携体制を構築し、同年からモニターツアーを実施する運びとなった。

## 3. モニターツアーの実施概要

モニターツアーはインフラを取り囲む地域状況により関係者、場所を選定し、年1回の開催としている。JATA加盟の旅行会社への呼びかけにより、各社のツアープランナーの方々に参加して頂き実施した。ツアープランナーの方々には、ツアーに対するアンケート調査を行い率直な意見を収集した。

過去に6回開催したインフラツアーの開催日、参加者、見学コースについては表-1に示すとおりである。九州管内のインフラに加え、周辺施設や地域の観光資源をコースに設定しモニターツアーを実施した。また、見学等に加えて、インフラツアーの商品化に向けた意見交換会を行った。

## 4. モニターツアーで得られた意見

モニターツアー実施後にツアープランナーの方々に対して行ったアンケートのとりまとめ結果を、以下(1)～(3)にて報告する。

### (1) インフラ毎の活用可能性について

図2はインフラ毎のインフラツーリズムとしての活用可能性を調査しとりまとめたものである。開催回毎にツアープランナーの方に調査したものであり、インフラツーリズムにおいて「活用できる」「活用できない」「無回答」の3項目を割合にて示した。

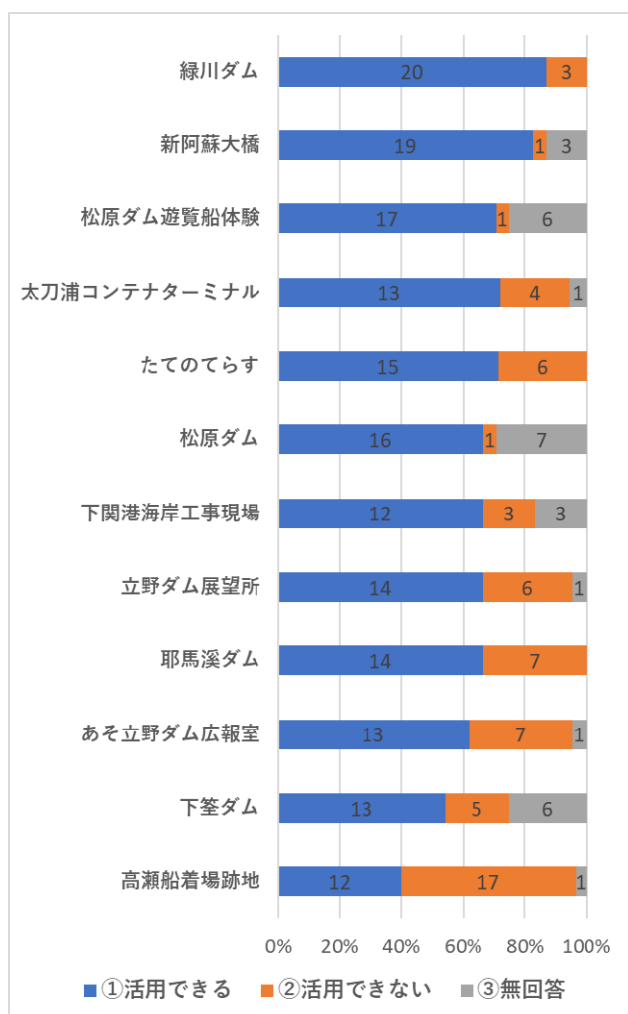


図2 インフラ毎の活用可能性

表2 新阿蘇大橋、緑川ダム意見とりまとめ結果

良かった点	新阿蘇大橋	<ul style="list-style-type: none"> <li>・工期や構造の説明があったので勉強になった</li> <li>・展望デッキからは新阿蘇大橋の全体も見ることができ、南阿蘇鉄道の橋の復旧途中も見れて良かった。</li> <li>・迫力がありダイナミックな景色がすごくよかった</li> <li>・現地の職員の方に橋の復旧作業等の話が聞けた事</li> <li>・現在の復興状況が知る事ができた</li> <li>・個人のお客様の立ち寄りスポットとできる点</li> <li>・休憩を兼ねて立ち寄りやすい</li> <li>・ジェラートがおいしかった</li> </ul>
	緑川ダム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受入可能人数が多いため団体での旅行でも行きやすい</li> <li>・ダム完成前後の歴史や地域への貢献、生活の変化など教育的要素が沢山ある</li> <li>・ダム内部ツアーができること</li> <li>・景色がきれいであり、季節毎に楽しめる点</li> <li>・ダムカードの配布や説明等が工夫されていた点</li> <li>・他の施設と連携した取り組みがある点</li> <li>・美里プリンがとても美味しかった</li> </ul>
改善点	新阿蘇大橋	<ul style="list-style-type: none"> <li>・展望台までの階段が急であり少しきつく感じられた</li> <li>・音声ガイド案内の設置等、個人旅行でも説明を聞くことができると良い</li> <li>・キャパが小さいのが少し残念</li> <li>・大型バスが一台のみではなく2~3台まとめて入れる様になるといい</li> <li>・トイレが少なく男女表記もわかりにくかった。</li> </ul>
	緑川ダム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・”特別放流”のようなイベントがあるとより面白い</li> <li>・体験（SUPなど）と組み合わせると提案しやすい</li> <li>・災害時の話もしてほしい</li> <li>・緑川ダムまで行く必要性が何なのか見いだせなかった</li> <li>・フェンス等の安全面に留意</li> <li>・トイレは改善してほしい</li> </ul>



図2 緑川ダム湖上のジップライド

表3 高瀬舟着場跡地の意見とりまとめ結果

良かった点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昔ながらの姿が残っておりそこに周りの景観があっいて落ち着いた</li> <li>・景色がきれいだった</li> <li>・何気ない風景だが歴史を感じられる場所であった</li> </ul>
改善点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ガイドさんなどの話を聞かないと分からない</li> <li>・ロマンを感じさせるような語り部が必要</li> <li>・案内資料等をもっと充実していけば観光素材になる</li> <li>・木を伐採し草を刈り石垣を復旧するくらいしないと普通の河岸と区別がつかない</li> <li>・バス駐車場所から遠い</li> </ul>

「活用できる」の回答率が8割を超えている新阿蘇大橋及び緑川ダムについての代表的な意見を表2にとりまとめた。新阿蘇大橋については、迫力のある橋梁を間近に見られる点や熊本地震からの復興について専門的な話も交えつつ知ることができる点、緑川ダムではダム内部ツアー等の非日常性を感じる体験ができることや、図3のようにフォレストパーク等の他施設とも連携した観光ができることが「活用できる」との回答につながったと考えられる。しかし、インフラツーリズムとして活用する上でダムの魅力はわかるが緑川ダムに行く必要性が何かといった意見もあり、他のダムとは異なる体験や地域特性を生かした活用を進める必要がある。

反対に、「活用できる」との回答が4割と低評価になっている高瀬舟着場跡地についての意見を表3にとりまとめた。良かった点として景観の良さや歴史を感じるといった点が挙げられるのに対して、ガイドや案内資料の必要性が改善点としてあがっており、インフラ自体の見え方や周辺の雰囲気に加えてそのインフラがどういったものなのかを効果的に示すことが、インフラツアーとして活用し商品化する上では必要であることがわかる。

(2)インフラツアーの魅力とは

前節ではインフラ毎の活用可能性についてのアンケート結果を示し、代表例について良かった点と改善点について述べた。本節ではモニターツアー全体について良かった点をまとめた結果について考察する。なお、アンケートにおける良かった点は、インフラツーリズムの魅力として評価されているものと捉え考察する。

ツアープランナーの方々のアンケート結果より得られたモニターツアーの良かった点を分類し整理すると表4のようになった。

表4に示した良かった点についてはインフラツーリズムに限らず通常の観光における魅力と共通するものも幾らか存在している。通常の観光行動と比較して、インフラを観光資源として活用するインフラツーリズムの魅力には、インフラならではの大きさやスケールから迫力を感じることや、普段入ることのできない場所で見学や体験ができる特別感、インフラの目的や役割・構造を知る

表4 モニターツアーの良かった点

分類	意見の例
迫力	ダイナミック・美しい・見応えがある
景観	眺望が良い・紅葉や雪景色が見られる 風情がある・雰囲気が良い
近隣施設との連携	グルメ・温泉・アクティビティ
人との触れあい	地元の人の温かさ・案内役の話が面白い
特別感	非日常的・日頃は体験できない・わくわく感
新発見	役割・歴史・知らなかったこと

ことができ新発見を得ることなどが挙げられる。また、ダムカレー（図3）や遊覧船体験（図4）などのインフラに絡めたグルメやアクティビティもあり、それらがインフラツーリズムの魅力に寄与していると考えられる。



図3 松下ダムカレー



図4 松原ダム遊覧船体験

### (3) モニターツアーの商品化に向けた課題

ツアープランナーの方々のアンケート結果より得られた課題を分類して整理すると表5のようになった。

モニターツアーで得た課題としては、駐車場が遠いことなどのアクセスやトイレが少ないといったハード面の課題、地域との連携体制の構築やインフラ自体のアピール不足といったソフト面の課題が抽出された。

表5 課題整理

分類	意見の例
アクセス	駐車場整備・階段等のバリアフリー化・案内表示
施設	トイレが少ない・団体受入可能か・雨天時の対応
安全面	万全の受入体制・テロ対策
説明	展示パネルの充実・地元ガイドの起用よりわかりやすい説明
連携	地域との連携・行政間の連携・他の施設との連携
PR	アピール不足・予約方法

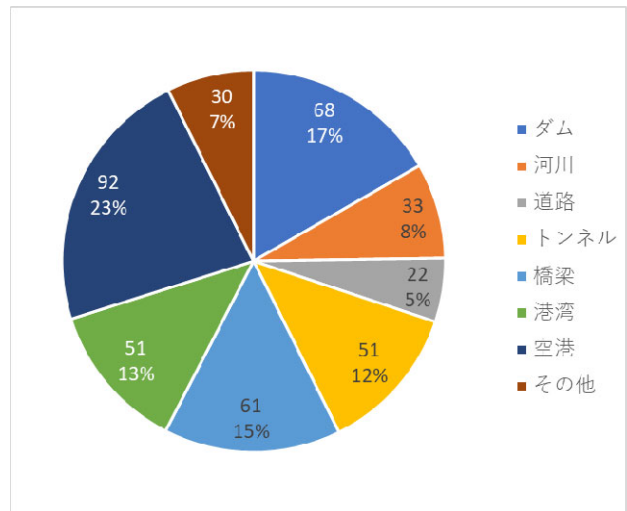


図5 観光コンテンツとして魅力のあるインフラ

### (4) 観光コンテンツとして魅力のあるインフラ

観光コンテンツとして魅力のあるインフラについて、ツアープランナーの方々のアンケート結果をまとめたものを図5に示す。

観光コンテンツとして魅力のあるインフラとしては、1位に空港が挙げられており次にダム、橋梁、トンネルと続いている。道路・河川についてはそれぞれ5%、8%と低い評価となっており、これらについては日常的に目にするインフラであり、非日常的なものではないため、インフラツアーとして活用するには表4で整理したような特別感が乏しいことによるものと考えられる。

### 5. インフラツーリズムの拡大に向けて

前項でインフラツアーの魅力及び課題、インフラの観光資源としての活用可能性について整理した。本項ではインフラツーリズムの拡大における「勘所」として前項に考察を加えるものである。

1つ目は、受入体制である。インフラを観光資源として活用する上で、安全に見学・体験ができることはまず第一に重要なことである。安全面に加えて、表5の課題整理の中でも、周辺に駐車場がない等のアクセスにおける課題があるインフラへの意見や、団体客を収容できるのかといった意見など、多数の意見を頂いた。これらは元々一般の見学者を受け入れることを前提として施設整備を行っていないため課題としてあがってくるものと考えられる。団体客への対応については、数人毎での交代制で別のフロアの見学を実施することなどが考えられる。安全面については、フェンスや手すりを付け安全対策を行うことは比較的対応がしやすいが、エレベーターを設ける等のバリアフリー対策については、インフラ個々の構造的な問題も新たに発生する可能性や管理費の増大にもつながるため総合的に検討する必要がある。また、近

年では3密の回避等の感染症対策も講じる必要があり、安全面やアクセス面等に加えて「安心して」お客様が参加できる受入体制がこれからのインフラツーリズムの拡大においては必要なことである。

2つ目は、インフラ特有の魅力を引き出し多くのお客様に知ってもらうこと、そして興味を持ってもらうことである。インフラ自体には迫力があつたり景観的な良さがあつたりと多くの魅力があるが、まずは多くの人にインフラを認知してもらいインフラに誘う仕掛けが必要である。例えばSNSを用いた日頃からのインフラ写真の投稿やイベント情報の発信が案として挙げられる。そして興味を引いた後は、そのインフラ施設がどのような役割なのかどのようにしてできたのかを知ることができる場づくりが必要である。展示パネルや説明資料もそうだが、モニターツアーでは説明者の人柄も魅力となっていたという意見があり、地元ガイドを起用することはインフラツーリズムの魅力向上の一助となると考えられる。そのインフラでしか出来ない体験や感動を創出し、その体験や活動をどうPRしていくか、効果的なインフラの魅せ方は何かを時代やニーズに合わせて検討していく必要がある。

3つ目は、他施設や他機関との連携にある。表2の新阿蘇大橋や緑川ダムモニターツアーでの良かった点について、ジェラートや美里プリンといった地元の食との連携があり魅力となっていることがわかる。第2回に実施した耶馬溪ダムのモニターツアーについては図6で示すような耶馬溪サイクリングターミナルからの自転車体験を活用し、実際にインフラツアーとして商品化も行っている。その地域でしかできないようなアクティビティや地元グルメと連携することは、他のインフラツアーとの差別化を図ることにつながり、インフラへの興味を増大させることに寄与すると考えられる。また、地域を巻き込み、インフラツアーを実施することで、地域の活性化につなげることができると考える。

## 6. 今後の展望

今回の取り組みはJATA会員のツアープランを立てるプロの目線から、インフラツアーを商品化するという観点で様々な意見を頂いた。インフラを観光資源として活用するには、顧客のニーズを的確に把握しアクションを起こしていく必要がある。そのために、対象のインフラでは何を売り出してしていけるのか、地域や施設と連携してどのような取組が可能なのかを把握すること、そして人々が足を運びやすく安心して参加できる受入体制を整えていくことが必要である。

インフラツーリズムで訪れる人については、インフラに興味のある方が来られるということでもあり、インフラの役割などを深く理解して頂く絶好の機会である。一方で、興味がない人についても日頃から情報発信を行い



図6 モニターツアーでのサイクリングの様子

インフラ自体を知ってもらうことや、地域での観光を巻き込んでインフラを観光資源のひとつとして働きかけ、新たなファンを獲得することがインフラツーリズムの拡大につながると考える。コロナウイルス感染者数が減少傾向にあるとはいえ、外出先では3密の回避などの感染症対策は必要であり、観光地として都市部ではなく自然の中を好む人も増えている。また、感染症対策に伴いテレワーク設備が発展・充実したことで、観光地や旅行先でテレワークを活用し休暇を取りながら一部仕事の時間を確保する「ワーケーション」<sup>6)</sup>という言葉も聞かれるようになった。ニューノーマル時代といわれる近年のライフスタイルにおいて、インフラツーリズムも浸透していくことができるようアプローチ方法を構築していく必要がある。

モニターツアーにおけるアンケートを回答して頂いた方の中には、インフラツーリズムの展望を「気軽にインパクト」と表現している方がいた。安全面やアクセス面を整備し気軽に安心して足を運べるようになること、そして非日常的な体験とともに迫力のあるインフラと出会いインフラ特有のインパクトを与えること、まさしくそうである。

以上の「勘所」を踏まえ、九州地方整備局ではインフラツーリズムの拡大に向けた本取組を継続して行っていきたい。

### 参考文献

- 1) 国土交通省 観光庁 HP：旅行・観光消費動向調査  
<https://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/shouhidoukou.html>
- 2) 国土交通省 観光庁 HP：報道・会見「観光立国実現に向けたアクション・プログラム」  
<https://www.mlit.go.jp/common/001000830.pdf>
- 3) 国土交通省 総合政策局 HP：インフラツーリズム拡大の手引き 試行版  
<https://www.mlit.go.jp/common/001281756.pdf>
- 4) 国土交通省 総合政策局：インフラツーリズムポータルサ

イト

<https://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/region/infratourism/>

- 5) 一般社団法人日本旅行業協会 : JATA-NET  
<https://www.jata-net.or.jp/>

- 6) 環境省 : ワークーション eco scope ecojin (エコジン)  
<https://www.env.go.jp/guide/info/ecojin/scope/20210728.html>